

このいのち「利他の行」に尽くしましょう

こんにちは、斎藤友蔵と申します。

本日は「利他の行」について、お話をさせていただきます。

文化や産業が発達し、生活が豊かになれば平和で楽しい社会が生まれてくると、誰もが想像します。

しかし、心の世界はそんなに単純なものではありません。豊かになればなるほど人間は欲深くなり、これに悪知恵がからみついて悪事を働くようになります。むしろ人をだましてでも、わき起こってきた欲望を満たそうと思ってしまいます。

加えて、目先の知恵が発達すると宗教心は薄れ、自分を反省する心も消えていきます。

そして、自分さえ良ければいいという考えや行動が現れてきます。

哲学者 ソクラテスは、「宗教を忘れた文明、宗教を忘れた豊かさは、悪魔を作っていく」と言っています。

赤ん坊だった頃の自分は、まったくの無力でしたし、無力だったことさえ覚えていません。両親はどんなに苦勞して育ててくれたことでしょうか。

何も知らなかった自分を教育してくれた先生。つらかった時、自分を励まし、慰めてくれた友人。空気や水食物をめぐんでくれる大自然。こうしたことを自覚させ、感謝することを教えてくれるのが宗教と言って良いでしょう。

歴史の残る「利他の行」に徹した人は数えられないくらいですが、近代的看護を確立した、ナイチンゲール。アヒンサに徹したマハトマ・ガンディーなどが頭に浮かびます。

アヒンサというのは、非暴力のことですが、「他人に対しても自分に対しても、暴力的な言動を慎む」といった意味を持った深い言葉です。

少し話がそれましたが、「利他の行」というのは、自分を犠牲にしても、他人に利益を与え、他人の幸福を祈ることをいうのです。

皆さまも、家族や友人が喜んでくれることを考え行動したことがありますね。

仏教では、それを「利他の行」と呼んでいます。

多くの被災地にかけつけてメディアでも注目を集めた、大分県の尾鼻春夫さんは齢 80 に

近いご高齢にもかかわらず、被災された方々に寄り添い、徹底したボランティア精神を保ち、各地での復旧活動に参加されていました。

そして、自宅で生活するときにも、ボランティアを行っているときと変わらぬ不憫な生活をおくっておられるようです。

真似しようにも、また、真似したくてもなかなか真似のできない尾畠さんの善行には頭の下がる思いです。

徹底して被災者の心に寄り添い、相手と同じ立場に自身の身をおき、自分よりも相手のことを優先する行為を、仏教では「自利利他」といいます。

自利は、自分の利益になること、つまり、自分が悟るために修行することです。

利他は、他人を利すため、救うために尽くすことです。

仏教を大きく2つに分けたとき、初期にできた上座部仏教という出家者のための教えと、一切衆生を救うことを目的とした大乘仏教があります。大きな船にのってみんなで安住の地、心が平安で幸せな世界へいこうということで、大きく乗ると書いて大乘です。

釈迦は覚りを開いたあと、教えを広く説いてまわりましたから、仏教の本筋は大乘に間違いないでしょう。

自分の幸福は、周りの人が幸せだからという考え方とセットであることが自然で、自分が周りに、社会に、どんな機能を果たしていくかが大切です。

ナイチンゲール、マハトマ・ガンディー、そしてスーパーボランティアと呼ばれる尾鼻春夫さんのように、常に利他の行を意識していくことが、本当の幸せには大切ではないでしょうか。